

SONRISA  
そんりさ

Vol.156



グアテマラの戦時下性暴力の責任を問う、セプルサルコ裁判で有罪判決が出て、傍聴席に向かって挨拶する原告団女性たち

グアテマラ戦時下性暴力裁判

- 02 グアテマラ戦時下性暴力裁判に有罪 ……新川志保子  
06 コロンビア 和平交渉の行方 ……柴田大輔  
09 メキシコ・ナルコ街道 ゲレロ …………… 山本昭代  
12 刺繍でメキシコに平和を・映画「カルテル・ランド」  
14 ラ米百景「天野芳太郎の思い出」 ……伊高浩昭  
15 ペルー音楽「アレキーパ 山と海の交わるところ」 …水口良樹  
17 ラ米子どもの本「国境をみざす子を描いた絵本」 … 宇野和美  
18 メキシコの食「魚のセビチェ」 ……ミゲル・アクーニャ  
19 ニュースクリップ ……サザエ

# グアテマラ戦時下性暴力裁判に有罪判決

新川志保子

## これまでの経緯

2000年に東京で開催された女性国際戦犯法廷・国際公聴会にグアテマラから参加したのがきっかけで、グアテマラの内戦下で性暴力の被害を受けた女性たちの組織化と活動が始まった。現在は全国3地域のマヤ女性160人が参加し、これに女性組織「グアテマラ全国女性連合UNAMG」、メンタルヘルス組織「社会心理行動と共同体研究グループECAP」、女性弁護士組織「世界を変える女たちMTM」の三団体が協力する「沈黙を破る女性たち連合（以下アリアンサ）」となっている。2010年には戦時下性暴力の民衆法廷を組織し、成功を収めた。そこからさらに加害者の処罰を求める女性たちの声があがり、セプルサルコの15人による集団訴訟を行うことになったもの。2011年9月には検察に刑事告発を行い、検察と被害女性グループ「ハロク・ウ」、MTM、UNAMGの4団体が原告となって裁判を起すことが決まった。

## セプルサルコ事件とは

内戦中の1982年、イサバル県セプルサルコにも軍の駐屯地が作られた。土地の回復運動をしていた人々や共同体・リーダー、教会のリーダーなどが標的となり、「ゲリラの協力者」、「内部の敵」として軍に殺されたり拉致されたりした。女性たちは夫を奪われた後で軍兵士に強かんされ、家や家畜・畑を焼かれ、着の身着のまま子どもを連れて山中に逃げなければならなかった。山中では食べるものもなく、子どもが飢えと寒さで死んでいった。その後軍に捕まり、駐屯地で性奴隷にさせられ、兵士のために洗濯や料理をすることも強制された。川で洗濯をしている時にも兵士に強かんされた。賃金は一切払われず、洗濯用の石鹸を自分で買わなければならなかった。その状態が数ヶ月から数年続いた。共同体の中では恥辱の存在という刻印を押され、極貧



2月25日「内戦犠牲者の日」裁判所前で犠牲者を悼む集い

の暮らしを続けなければならなかった。女性たちが受けた傷は精神的、肉体的なトラウマとなり現在にいたるまで苦しみが続いている。

## 裁判まで

2012年9月には予審が行われ、15人のうち11人について証拠が十分だと認められた。また事件の重要性や関係者の年齢、健康などを考慮して、この時の女性たちと重要証人の証言を事前提出証拠とし、このビデオテープをもって公判の証言とすることが認められた。女性たちは、安全のために顔を隠し、スペイン語を話さないで、母語のマヤ・ケクチ語で証言し、スペイン語の通訳がついた。

また、この裁判を準備する中で、駐屯地近くで秘密墓地の発掘が行われ、女性たちの夫数人を含む遺体が発掘された。そのほとんどは拷問の痕があった。女性たちが殺されるのを目撃した一人の女性とその娘二人の遺体も発掘された。

2014年6月にはエステエルメル・フランシスコ・レイェス中尉とエリベルト・バルデス・アシフ軍コミッショナー（いずれも当時）が容疑者として逮捕された。



被告二人の容疑は、セプルサルコの軍駐屯地において、レイェスが11人の女性に対する性暴力、性奴隷、家事奴隷の強要などの人道に対する罪、3人の女性（母と娘二人）の殺害、2人の少女への残酷な扱い、アシフが6人の男性（原告女性の夫）の強制失踪、女性への性暴力という人道に対する罪を犯したというもの。

#### ■原告団の女性たち■

ロサ・ティウルさん、ロサリオ・ショさん、カタリーナ・カアルさん、マルガリータ・チュブ・チョクさん、マグダレーナ・ポップさん(死亡)、カンデラリア・マアスさん、ピセンタ・コルさん、デメシア・ヤットさん、カルメン・ショルさん、マリア・バア・カアルさん、フェリサ・クックさん、マヌエラ・パーさん、アントニア・チョックさん、セシリア・カアルさん、マティルデ・スブさん

## 公判

そして今年2月1日から公判が始まった。初日には米国大使やヨーロッパ各国大使なども傍聴に訪れるなど、国際社会の関心も大きかった。セプルサルコ以外からアリアンサに参加する女性たちも交代で傍聴にきていたほか、ノーベル平和賞のリゴベルタ・メンチュウさん、コナビグア代表のロサリーナ・トユックさんもコナビグアのメンバーらとともに連日傍聴に通った。公判はラジオやインターネットで実況中継された。

## 原告からの証拠・証言提出

原告側は被害者証言の他、目撃者証言、専門家証言など30人近い証人を準備した。専門家証言は、土地問題・登記について、軍事史、マヤ文化とジェンダー、マヤ・ケクチ語の言語表現、秘密墓地からの発掘遺体の検証を行った法医学チーム、人権侵害被害者の証言の信憑性について、法理建築学

(arquitectura forense) など多岐に渡る分野から、被害者が訴えたことを補足し、それが事実であったことを立証するために行われた。また、52の発掘



公判の様子

遺骨・遺品も証拠として提出され、これは裁判史上初めてのことだった。

専門家証言では以下の点が明らかになった。

- ✓原因は土地問題。セプルサルコ一帯の土地はマヤ・ケクチの人々が昔から住み続けていた。1830年に植民者が入りこみそこを「農園」とし、住んでいた人々を農奴扱いするようになった。この「農園」の獲得は不正な手段で行われた。本来の正当な所有者はマヤ・ケクチの人々である。
- ✓何世紀にもわたって土地を奪われ、小作人として収奪されてきた農民らが組織化して土地の回復を要求し始めたことに危機感を持った農園所有者が、軍に協力を要請。農園の中に軍が駐屯地を作り、地主から協力を受ける代わりにその利益を守り、土地運動をしている先住民を弾圧した。軍コミッショナーなど内部にいる協力者を使って彼らを「ゲリラの協力者」として告発させた。
- ✓セプルサルコ一帯はゲリラの活動地域ではなかった。地域の人々はゲリラが何かも知らなかった。
- ✓暴力の主体は、軍と準軍事組織を通じて行った反乱鎮圧の軍事国家であり、この暴力の被害者はセプルサルコ村の住民であった。そしてこの軍事弾圧で利益を受けたのは一帯の「土地所有者ら」であった。
- ✓セプルサルコにおける弾圧は、内戦中の軍反乱鎮圧戦略で行使された軍事行動と同じパターンである。つまり、内戦中のグアテマラで行われたすべての対ゲリラ作戦の責任は、軍の指揮系統を辿って共和国大統領、軍最高司令官、防衛長官、軍参謀長官にあると結論づけられる。
- ✓駐屯地は拷問・殺害センターであり、兵士たちの慰安所でもあった。

- ✓被害者の証言は、何度話しても一貫して整合性があり、ともに目撃者の証言も、それぞれが一致し、互いの証言を補強している。そして状況証拠とも合致する。それゆえ、これら暴力の被害者の証言は信用できる。
- ✓共同体の文化や習慣があったが、暴力により文化的、社会的、経済的に破壊された。夫を失うことは収入の道が閉ざされ、家長を失い、支えをなくすることを意味する。ケクチの人々の世界観、自分たちの住む世界の解釈、価値観、物質的なものと精神的なものとのつながりなどがばらばらにされた。文化の破壊は、共同体の中の親族関係のあり方や権威体系、財産、生産、伝統医療や精神性の知識とその伝達、助け合いのあり方などを変えてしまった。それまでの普通の生活ができなくなった。
- ✓女性たちの夫が殺される前には、貧しいけれども家があり、着るものがあり、家畜があり、収穫があった。が、これらがすべて奪われた。
- ✓被害を受けた女性たちは、自分を価値がない存在だと思ひ、自尊心が持てず、夫や子どもを失ったことへの罪の意識を持ち続けた。周りから嘲笑われる、噂になる、また、一人になることで文化的社会的な空白に置かれた。暴力で受けた傷や病気などで自分が完全でないと思う、などのトラウマを抱えた。
- ✓共同体はこの暴力に対抗することができず、女性たちが自分の身に起こったことを理解し、苦しみを乗り越えられるよう社会的文化的な支援をすることができなかった。
- ✓これらケクチ女性が被った性暴力の嵐を理解するには、歴史的で体系的なマヤ人への差別と搾取がグアテマラ国家の基礎をなし、先住民女性はこの社会的人種的ヒエラルキーの最下層に置かれていたことを知らなければならない。先住民女性は、支配階級から、考えや感情を持たない存在、理解する能力がなく、人間としての価値を持たない存在、汚くて醜い存在、殺しても、強かんしても、拷問してもかまわない存在とみなされてきた。

## 被告からの反証

二十数人を予定していた被告側証人のほとんどが出廷せず。数人の証人のみだったが、いずれも原告

側からの証言・証拠を覆すだけのものは提出できなかった。最終弁論では、弁護士が女性たちは皆嘘つきで、売春婦だった、専門家証言も根拠がないとすべてを否定した。

## 判決

判決は原告の最終弁論が終わった2月26日金曜日に言い渡された。法廷は満席、プレスも大勢来ている。そして裁判長ジャスミン・バリオスによる判決文の読み上げとなった。まず、判決は3人の裁判官全員一致によるものであることを述べた上で、①戦時下の性暴力・性奴隷の被害（人道に対する罪）、②3人の殺害、③7人の行方不明についてそれぞれ判断した。

①については、セプルサルコはマヤ・ケクチ先住民が住んできた地域で、軍がセプルサルコに駐屯地を作ったが、そこはゲリラの活動地帯ではなかったこと、土地を取り上げられた人々が土地回復の運動をしていたが、それを嫌った土地所有者が軍と結託（要請）して、それらの人々を「敵」として攻撃の対象としたこと、セプルサルコは伝統的な家父長制で成り立っている共同体であり、そこで夫を失うことは女性たちが孤立してしまうことにほかならない、女性たちへの性暴力を含むさまざまな暴力は女性たちの尊厳を踏みにじり、大きな傷を与え、そして「敵」を破壊する有効な手段であったこと、共同体全体への攻撃であったこと、女性たちの証言は専門家証言により補強され、それが真実だという確証があるという判断を下した。そして、彼女たちと共同体に加えられた暴力は人道に対する罪であるとし、被告それぞれに各30年の刑を言い渡した。

②は、ドミンガ・コクさんとその幼い娘二人の殺害について、発掘された遺骨の検証結果および、複数の証言から殺害が残酷なものであったこと、そしてその責任がエステエメル・レイェス中尉（当時）にあったと判断。一人につき30年、計90年の刑を言い渡した。

③は7人の強制失踪については、直接関与したかその指揮をしたのがエリベルト・アシフであったと

判断。強制失踪は家族に終わりのない苦痛を与える重罪であるとし、それぞれに対し30年、計210年の計を言い渡した。以上、合計でレイェスには120年の刑、アシフには240年の刑（いずれも執行猶予なし）が科された。

判決の中では、証言した被害女性たちの証言が引用され、それが真実であること（これは彼女たちが証言で繰り返し「自分は嘘を言っていない、本当のことを話している」と必死で語ったのに応えたものと思われる）、そして「セプルサルコの女性たちが受けるべき尊敬と価値をここに認めます。30年以上も沈黙の中で待ち続けたのです」とも述べた。最後に、このような犯罪が今後決して繰り返されてはならないことも強調した。

言い渡しが終わると、法廷の傍聴人が総立ちになり、女性たちと原告団に大きな拍手が沸き起り、しばらく鳴り止まなかった。長く苦しい道のりだったが、女性たちが正義を勝ち取った瞬間であった。支援者らも感無量の表情でお互いに抱き合い、喜びを分かち合っていた。女性たちも傍聴席に手を振って応えた。

傍聴席からは「われわれはセプルサルコだ！」という声に続いて「これはまだ始まりにすぎない！ Esto apenas empieza！」というシュプレヒコールも起こった。

判決はほぼ求刑どおりだったが、違っていたのが①の解釈だった。性暴力で被害女性一人一人について30年、計330年という求刑に対して、判決は女性らとその共同体の被害として全体で30年だった。刑量としては軽くなるが、女性たちだけでなくその共同体への被害も認めるといふより広い意味でとらえたもので、求刑以上の判決だといえることができる。この点は原告側も高く評価している。

3月4日には賠償の言い渡しが行われた。レイェスは被害者女性11人にそれぞれ5万ケツアル（約80万円）を支払うこと、アシフは強制失踪の7遺族にそれぞれ25万ケツアル（約400万円）を支払うこと



裁判中、原告女性たちを訪ねた

を命じた。他に、それぞれの該当諸機関に対し、セプルサルコとその周辺で強制失踪させられた人々の行方を捜査し続けること、セプルサルコでの学校施設を改善し、こども、青少年、女性のための中等教育施設を建設することと奨学金を出すこと、強制失踪させられた人々が始めた土地登記の問題を解決すること、教科書にセプルサルコの女性たちの裁判についての記述を載せること、セプルサルコ裁判の判決を24のマヤ言語に訳すこと、2月26日を「性暴力、性奴隷、家事奴隷犠牲者の日」と制定するように手続きを行うこと、などを命じた。この内容も非常に高く評価された。が、賠償命令とそれが実現されることには大きな隔たりがある。これらの賠償をどう実現していくかが今後の大きな課題となるだろう。

このセプルサルコ裁判は、戦時下の性暴力を戦争犯罪、人道に対する罪としてその国で裁くもので、世界でも初めて、歴史的にも大きな意味を持った。また、性暴力のみならず、強制失踪や拷問、殺害などの人権侵害が個人と共同体に与えた被害も人道に対する犯罪である、としたこの判決は、内戦中に被害を受けた多くの人々や共同体に裁判の道を開くものでもある。

最後に、原告の15人の女性の決意と勇気を、そしてアリアンサ3団体や関係者の裁判を実現するための努力を改めてここで称えたい。

原告女性たちを支援するためにTシャツ・女性たち手作りのショルダーバッグを販売しています。ご希望の方はRECOM（裏表紙）までお問い合わせください



# コロンビア 和平交渉の行方 柴田大輔

50年を超える国内紛争が続くコロンビアでは、紛争当事者である反政府ゲリラのひとつ、コロンビア革命軍（Las FARC）と政府間の和平交渉が2012年から続けられている。交渉期限とされていた3月23日を迎えてもなお最終合意に至らず、交渉継続が伝えられた。

長い紛争に関わらざるを得ないところで生きてきた人々の元を、2月初旬から訪ね歩いている。この長い紛争の大きな節目を迎えようとする今、人々はどうか過ごしているのか。

## 1. コロンビア難民

アンデス山脈の西側、標高2000mほどのところを流れるサン・ファン川。コロンビアとエクアドルを隔てる幅100mほどの川の兩岸に、生い茂る木々に囲まれた小さな町がある。コロンビア側をタジャンビ、エクアドル側をチカルという。川にかかる木造の橋を人々が行き来する。毎週末にエクアドル側のチカルで市が開かれると、対岸のコロンビアからも多くの人が買い物に訪れるという。国境とはいえここに入国管理局はなく、人々はここを行き来し暮らしている。

2000年代に入ると、国境近くで活動するゲリラと政府軍の衝突、対立する武装組織への協力を疑われる住民への迫害により、多くのコロンビア難民がこの国境を越えエクアドルに渡った。チカルから車で4時間ほどのところにある山間の町リタに、先住民アワを中心にしたコロンビア難民グループが暮らしている。

2007年に初めてリタを訪ねた私は、この町を中心に周辺に暮らす40家族ほどのコロンビア難民グループと知り合った。

当時、彼らはルイス・フェリペさんという男性をリーダーに、移住先に新しい故郷を作ろうと努力を続けていたが、仕事は農場の草刈りや収穫など日当の安い日雇い仕事しかなく、生活基盤を築く事に苦勞していた。多くの人々はコロンビア時代、自分たちの土地を持ち、食料、住居など、生活に必要な主なものから得る知恵を持ち生きてきた。土地を持

コロンビアとエクアドルを結ぶ川を行き来する



ため異国での生活は、金銭を持つことが生きるために重要となる。稼いだ少ない賃金をやりくりし、それまでならば自分たちで作ることができた作物を買い、狭い部屋の家賃を払う。年配のある男性は、不自由な生活に自身への強い不甲斐なさを感じていた。他の人も普段言葉にはしないが同じであったように思う。普段は男勝りの元気のよい女性が、お酒がはいった夜、泣きながら「コロンビアへ帰りたい」と漏らしていたと人づてに聞いたことがある。不安を抱える先の見えない生活の中、同郷の人々の繋がり、将来への活動は心の支えになっていた。

その後、2011年に事件に巻き込まれルイスさんが亡くなるが、辛抱強く他のメンバーたちは活動を続けてきた。2010年にASOCIACIONとして国に登記。対外的な信用を得ることにつながる。2011年には国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）を通じて養鶏のプロジェクトが始まった。当時在籍していた20家族の各家庭に100羽ずつ鶏が届いた。それ以前にも同様の支援を得たことがあるというが、不安定な経済状況から、各々で飼育し販売するか、家庭内で食料として処分していた。しかし、この時は全体でまとめて飼育、販売し、銀行から借り入れた資金を合わせて、リタ近郊に11ヘクタールの土地を2013年に購入し、各家庭に0.5ヘクタールずつ分配した。念願だった自分たちの土地を手に入れた。土地を得たことで生活の土台が生まれた。その安心感は伝わってきた。今後は、グループの人々と近隣のエクアドル人で作った組織で、現地の特産品である調理用バナナを薄くスライスし揚げた「バナナチップ」を販売する事業を展開していくと話す。



⑤ 難民による新しいコミュニティに家が建つ＝エクアドル・カルチ県 ⑥ 街に暮らした若者たち＝コロンビア・ナリーニョ県

若い人たちは、地元で出会ったエクアドル人と一緒に、家庭を築く者も多くなり、それぞれが新しい未来へ歩き出しているように感じた。しかしその一方で、年を重ねた人の複雑な思いも耳にした。

同じ難民グループの40代の女性は、久しぶりに顔を合わせた私に「本当は帰りたい」とつぶやいた。コロンビアに残した親、兄弟、慣れ親しんだ土地が常に頭にある。和平交渉の話は誰もが気にかけている。彼女がエクアドルに来て10年が経つ。その間に、様々な心に揺れがあったのだろう。「もう帰らない」と、他国で生きていくためにそう決意した人もいる。そのために資金も労力も注いできた。現在は事態が落ち着いている故郷への思いの間で揺れているようだった。

## 2. コロンビアの様子

難民たちの故郷の一つであるアワ民族自治区マグイを訪ねた。

2013年に初めて訪ねた時、私は街道沿いの町から6時間以上かけて歩いて行った。今は、未舗装ながら道路が拡張されてかなり奥までバイクが入ることができるようになっていた。バイクで1時間の後、急な九十九折の坂道を含めて2時間歩くと以前に居候していたマグイの学校に着く。

学校には、政府による新校舎建設プロジェクトが始まっていた。外部からの技術者が泊まり込みで仕事をしている。合計で1億円にもなるプロジェクト。一時は国内でもっとも紛争の激しかった地域だけに、「紛争終結後」への明るさの象徴のように見える。

現在和平交渉に望んでいるFARCは武力行使を止め

ており、以前この地域に拠点置いていた部隊も他の地域へ移動し、1年以上武力衝突が起きていない。

状況の落ち着きから、地域に戻ってくる人々がいる。2000年代に入り激しさを極めた暴力から、一時は300家族ほどの住民の大部分が避難民となり地域を去った。しかし、年齢を重ねた人ほど慣れ親しんだ土地を離れての生活に馴染むことができず、苦悩を重ねてきた。そうした人々が地域へ帰りつつある。反面、外へ出た若い世代はほとんど戻ってきていない。働き盛りの世代ほど、子どもが町の学校に通うなどし、生活拠点を動かしにくくなっている。町に基盤を置き、山には作物の種まきと収穫、その間の必要な時だけ作業をしに戻るといった生活の形が定着しつつあるように思える。現金収入も町で働く方が効率が良い。

その中で、20代、30代の人で立て続けに「もうトウモロコシはまかない」という人に出会った。大きな変化だと感じた。ここでは、4、50代以上の人にとってトウモロコシをより広い面積にまき、収穫することが、他の人に対して見得を切る場面であった。それが男としての「かっこよさ」であった。また、トウモロコシをめぐる一連のサイクルが、地域の時間の流れの基礎的な役割も果たしていたように思う。街へ出ることによって、「金銭を稼ぐ」ということの重要性がより高くなり、人々の価値観が急速に変わりつつある。

## 3. 人権侵害

今年2月、国内南部カウカ県で水資源保護を訴えていた先住民族ヤナコナのリーダーが何者かに殺害さ





㊦老いた父親を介護する避難民の男性＝コロンビア・ナリーニョ県 ㊦15歳の誕生日を迎えた女性を祝う＝プトゥマヨ県

れた。他にも国内各地で今年に入り、開発に反対する社会活動家や、土地の権利を訴える地域指導者らの殺害が続いている。また人権団体Somos Defensoresによると、昨年一年間に全国で63人の社会活動家が殺害されたのを始め、報告があるだけで682人の社会活動家が何者かによる圧力を受けている。北部カウカ先住民族協会が運営するラジオ局で記者を務める女性に話を聞くと、「今はもう、以前のような大きな虐殺は起こらない。しかし、権力に対する運動には強い圧力はかかっている。個人を狙った殺害は事件は今後も起きる」と話した。

#### 4. 紛争は終わるのか

反政府ゲリラFARCで活動する34歳の男性から話を聞く機会があった。彼は12歳の時にゲリラと出会い、15歳の時に入隊。以来現在まで戦闘員として活動を続けている。

何故ゲリラに入隊したのか聞いた。初めは好奇心、かっこよさ。その場に長く身を置くに従って、家族のような親密な関係に居心地の良さも感じていったという。激しい現場に身を置き様々な経験を共有することでより仲間との結束も強くなっていった。

彼は、共産主義社会を築くという目的、いかに現在の社会が一部の権力者によって貧しい人々が搾取されているかを語った。その上で、彼らが果たしてきた役割を話した。何度も人に話してきたことなのだろう。語りにつまみかなかった。

現在の交渉について聞いた。この時点で交渉期限とされていた23日を過ぎていた。一番の懸念は、武装解除の際の安全だと話した。念頭には、和平交渉に応じ1985年に愛国同盟として政治参加した際に、

関係者3000人余りが暗殺されたことがある。現在政府は、全国で活動するFARC戦闘員全てが武器を置き一か所に集まることを要求している。それに対してFARCは現存し敵対する民兵、政府軍に攻撃される危険性を指摘している。

末端のFARC兵士の中には、もう一つのゲリラ国民解放軍へ移るものも出てきているという。こちらも和平交渉へ臨む姿勢を見せているが、政府は「人質を解放しない限り交渉には望まない」と言い切る。

1990年代以降、暴力が過熱する場所という意味で「ソナ・ロハ（赤い地域）」と呼ばれてきたカウカ県北部。そこに位置するナサ民族自治区のひとつピオヤの首長を務めるルス・メリーさんはこう語った。「紛争の被害を受けてきたのは私たちです。また紛争の原因である貧困、土地の権利、地下資源、全てここにあることです。ここには満足な医療施設もありません。

（和平交渉が行なわれている）ハバナで話されていることの

全てがここにあるのに、私たちはこの交渉の蚊帳の外にいます。一体誰のための和平交渉でしょう」



今後、どのように事態は推移していくのだろう。



# ナルコ街道をゆく2015 ゲレロ 山本昭代

前回の続き、2015年8月末から9月半ばにかけてのメキシコ旅行の話。まず訪れたのは、2014年9月に43人の師範大学学生が拉致され行方不明となった事件で、世界的にその名が知られることになったゲレロ州イグアラ市。さらに州都チルパンシンゴ近くのアヨツィナパ師範大学に行った。師範大学というのは、なり手の少ないへき地の学校で働く教員を養成するための学校で、貧しい農村部の若者たちを中心に受け入れる全寮制大学である。とくにゲレロ州では古くから左翼活動家を輩出してきた伝統があり、国からは疎まれ、予算は削減され、つねに閉鎖の危機にさらされている。

アヨツィナパはじめ師範大学の学生や教師らのアナーキスト的な振る舞いに関しては、43人の学生行方不明事件で広く一般から注目を集めることになったが、世間では賛否両論である。私がゲレロ州内をバスで移動中、突然バスが停止させられ、州内の別の師範大学の学生が乗り込んできたことがあった。

「州都での集会に参加するための募金をお願いします」と募金箱を持って回ってきたのだ。窓の外を見ると、覆面で顔を覆った学生が、私が乗っているバスのガソリタンクのふたを開け、ゴムホースを差し込んでポリタンクに移しているのではないか。うわさに聞いた、ガソリンの強制徴用だ。バスの運転手が駆け寄ってきて、「そのくらいにしてくれ」といっているようだった。彼らはバス会社から無賃でバスを借り、バスの燃料が足りなくなれば、こうやって別の路線バスからいただいて、無銭バス旅行を続けるのだという。食料など必要経費は、募金でまかなうというわけなのだ。一般の乗客は一時停止させられるだけでたいした被害はないが、バス会社にとってはとんだ迷惑だろう。

バスの車内の乗客たちは、たいていの人が小銭を募金箱に入れているようだったが、ひとりの年配の女性が大声で話しているのが聞こえた。

「ああいうことをやっているから、あんな目にあうのよ」「貧しい学生だとかいってるけど、ブラン

アヨツィナパ師範大学の壁画



ドのサングラスをして、スマホだって持ってるよ」

確かに、楽しげに談笑している学生たちは、ごく普通の大学生のいでたちに見える。メキシコは今も貧富の格差が大きいとはいえ、昔のように着替えの服もないというレベルではなくなり、貧困が見えにくいものになってきている。さらに黒い覆面でガソリンを抜き取る学生の姿は、言われなければ犯罪者と見分けがつかない。実際、犯罪行為だと自覚しているから、顔を隠しているのだろうし…。目的のためには法を無視しても、というアナーキズムは、今日のメキシコで一大産業にまで拡大してしまった組織犯罪とも通じる危うさがある。師範大学生たちに関しては、そんなことはないと思いたい。

## 覆された「歴史的真相」

チルパンシンゴ3日目、モクテスマの復讐にやられて、1日起き上がれず(。;)。日本から持ってきた正露丸なんぞは気休めにもならず、近くのクリニックに行き抗生物質をもらってきた。私がお腹を抱えて寝ている間に、アヨツィナパ学生43人拉致失踪事件に関連した重大発表があり、首都では大騒ぎになっていた。事件の真相解明のため、米州人権委員会から派遣されていた外国人専門家チームが再調査した結果、2015年1月に司法警察長官が「歴史的真相」だとして発表していた内容を完全に覆す、いくつもの事実が公表されたのだ。簡単にまとめると次

の通り。

1. 43人の学生たちはイグアラ市の隣りのコクラ市のゴミ焼却場で焼かれた、とされていたが、それだけの数の遺体を焼くには3トン以上の薪か1.3トン以上の古タイヤが必要で、60時間以上燃やし続けなくてはならない。炎も大きく上がり、地元住民が目にはしないはずがない。実際にはそのような事実はなかった。（これはのちに、当日の衛星写真を解析することでも確認された）。
2. 学生たちが無賃で借り受けたバスは4台とされていたが、実際には5台あった。4台のバスはいずれも銃弾を受けていたが、5台目だけは無傷だった。
3. 学生たちに発砲したのは市警察で、軍や連邦警察は関与していなかったとされていたが、実際には軍と連邦警察もその場に居合わせていた。事件の記録もとっていたが、襲撃を阻止しようとはしなかった。
4. 学生たちは市長のイベントを邪魔しに来たとされていたが、実際には学生たちのバスが発発した時間には、イベントは終了していた。

また、麻薬マフィアが暗躍する犯罪多発地域だけに、市内の各所に監視カメラがあるにもかかわらず、その録画が故意か過失か、ほとんど保存されていないなど、捜査のずさんさも暴露された。

専門家グループの中のペルー人犯罪学者によると、5台目のバスがほかの4台と違って一切銃弾を受けておらず、また証拠となるビデオや軍・警察の記録からその存在が消されていること、そして襲撃の過激さからみて、この5台目のバスに麻薬が積載されていた可能性があると結論づけた。実際、イグアラの地元マフィアはシカゴマフィアとつながりを持ち、イグアラから長距離バスを用いて地元産のヘロインが輸送されていることがわかっている。そのため、マフィアやそれに協力する市警察官らは、バスが市外に出ることをなんとしても阻止しようとしたのだろうという。学生たちも運転手自身も、バスの床下にそんな物騒なモノが仕込まれているとはつゆ知らず、乗り込んでしまったということなのか。

## でっち上げの証言

メキシコの週刊誌「プロセソ」（2015年9月13日、2028号）によると、コクラ市のゴミ焼却場で働く2人の職員は当初、焼却場は事件の後1か月間ずっと使い続けていたが、その前と何の変化もなかったと証言していた。しかし首都の組織犯罪専門の捜査機関に連行され尋問されてのち、前の証言を覆している。2日間にわたって食事も与えられずに脅迫され、捜査官が書いた調書に無理やりサインさせられたというのだ。さらに2014年11月、ゴミ焼却場で学生らの遺体を焼いた実行犯で、麻薬組織「ゲロス・ウニードス」の殺し屋だとして4人の男性が逮捕された。しかしこれもまったくのでっち上げで、実際には4人は貧しい建設労働者で、マフィアとは何のかかわりもなかった。当局に連行され、拷問を受けて無理やり「自白」させられたというのだ。

前司法長官ヘスス・ムリージョ・カランが2015年1月の記者会見で発表した内容は、とんでもない嘘で固めたものだった。なぜそこまでする必要があったのか？ 外国人専門家チームの再調査結果が発表されて以来、デモ参加者らは、「Fue el Estado (犯人は) 国だった」というプラカードを掲げるようになった。当局は犯罪を見て見ぬふりをするだけでなく、犯行そのものにも深くかかわっていること



「(犯人は)国家だった」という文字を描き出した首都中央広場でのイベント。

<https://lasa.international.pitt.edu/forum/files/vol46-issue1/Debates-11.pdf#search='fue+el+estado+mexico+ayotzinapa'>

が明らかなのだ。だが、誰がどのように？という謎はまだ解明されていない。そのカギとなるのがイグアラ市を管轄する軍大隊ではないかと疑われているが、関係する軍人らへの面会調査は今日に至るまで拒絶されたままである。

## 学校までゆすりの対象に

メキシコシティでも州都チルパンシンゴでも、抗議集会が連日のように開かれる中、体調不良の私は逃げるようにして陽射し豊かなアカプルコへ。太平洋側の古くからの港として、日本とも深いつながりがある。400年も昔、伊達藩士の支倉常長がローマへの旅のため立ち寄った地でもあり、海岸通りにその像が建っている。

かつて世界の富豪やセレブがバカンスを楽しんだメキシコきってのリゾート地。青い空と海、白い砂、そして季節外れの観光客より数が多い物売りたち。最近ではアカプルコという「危険」というイメージがついてしまい、客足が遠のきがちなところ。アカプルコは、いまやホンデュラスの国境の街、サン・ペドロ・スーラに次いで世界で2番目に殺人発生率の高い都市である。

タクシー運転手に治安の状況をたずねると、「いや、殺人なんかが起こるのは周辺の下町のほうだ。ホテル街は安全だよ」といい、海岸通りをパトロールする観光警察を指し示した。観光客らに対応することを専門とする警察官がいるのだ。それがどの程度効果を上げているのかは知らないが、最近も中心街で麻薬組織がらみと思しき殺人事件があり、数年前に外国人観光客らが強盗強姦の被害に遭ったという情報もある。太平洋岸の重要な港街だけに、違法薬物の経由地としても重要で、またキャバレーやディスコなど、もともとみかじめ料取り立ての対象だった商売が多いところでもある。テンプル騎士団、ファミリアミチョアカン、ハリスコ新世代、シナロア、ベルトラン・レイバ、ロス・セタスetc. あちこちのカルテルやそれと組んだ地元ギャングやらが勢力争いを繰り広げ、報復合戦を繰り広げる舞台となってしまうのだ。

さらに恐ろしいことに、この地のギャングたち



ミゲル・アレマン湾岸通りに建つ支倉常長像

は、小学校や中学校の教師たちを脅し、月給の半分を上納金として払えと脅したりもする。払わなければ教師や生徒らへ危害を加えるぞという脅迫は、もう10年も前からアカプルコ市周縁部の貧困地域で始まっていたといい、100以上の学校が一時休校した。脅しだけではない。武装した集団が学校に押し入って、その場で金を出せと要求するのである。これまでに殺害された教師は22人にもものぼり、ほかに8人が誘拐され、多くの女性教師が強姦されたという。

さて、私は観光案内所の客引きから割引きだよと勧められ、海岸通りのホテルに入った。窓からの海の景色は悪くなかったが、それより前に目に入ったのが、電話機の隣の「ホテル滞在中にゆすり電話を受けた場合」という注意書きだった。3日間の滞在中、幸いなことに注意書きを読み直すような事態は起きなかったが。

ゲレロ州。山岳地の金鉱山にアヘン栽培、海岸地域の超高級リゾート。その周辺に広がる貧しい先住民農村や近隣州から職を求めてきた人々のスラム。光と影のようなこの格差のコントラストが、組織犯罪の暗躍を阻止できない状況を作り上げているのかもしれない。



# Bordamos por la Paz Tokio

## メキシコに平和を 刺繍サークル 東京

メキシコの麻薬戦争と呼ばれる暴力的な状況のなか、何十万人もの死者、行方不明者が出ています。そのような状況を訴え、犠牲者に寄り添おうとする市民運動のひとつが、「メキシコに平和を 刺繍サークル」です。東京では、月1回、10人前後が東京・新宿のカフェに集まって、おしゃべりしながら刺繍をしています。出来上がった刺繍はフェイスブック上で公開し、メキシコをはじめ世界中の人たちと共有し、ときにはメキシコを訪れるメンバーが現地に持参することもあります。

「平和のための刺繍の会 メキシコ」のアイデアは、2010年に「赤い泉」という名前のグループが考え出したものです。このグループの名前は、2011年4月、「正義と尊厳を伴う平和のための運動」が始まったとき、あるアーティストグループが、メキシコが血まみれで息も絶え絶えになっている現状を視覚化するために、メキシコシティのあちこちの噴水を赤い植物性染料で染めるというサプライズ・アクションを行ったことから来ています（「平和、記憶、正義のための刺繍：視覚化のプロセス」p.60から）。

このグループが、のちに平和のために刺繍をすることを人々に呼びかけました。複数のグループが作られ、日曜ごとに公園や広場に集まるようになったのです。東京では、フェイスブックを通じてこの活動を知った人たちが始めました。最初に知りあったのは、ゲアダラハラのグループです。「赤い泉」のグループが毎週日曜にコヨアカンの公園に集まって刺繍をしていることを知ったのは、そのあとのことです。

実際のところ、誰が始めたかは問題ではなく、今ではメキシコだけでなく様々な国で多くの刺繍グループが作られています。それぞれのグループは独立していて、各々好きなように刺繍していますが、殺害された人の名前を赤い糸で、行方不明の人の名前は緑の糸でハンカチに刺繍するというのがもともとの考えです。

①メキシコシティ、コヨアカン公園で刺繍をする人々 ②2016年2月の刺繍の会。FBから



日本では、デザインされたハンカチを刺繍し、メキシコで起きている悲劇的な人権侵害を視覚化するような短いメッセージで絵柄を囲むということをしています。政治犯や環境運動家も含む暴力の犠牲者への支援や、国のために日々、命を危険にさらしているジャーナリストや人権活動家への感謝のメッセージを送ることも行っています。(Botan Doro)

「メキシコに平和を 刺繍サークル」はどなたでもご参加いただけます。刺繍の上手下手は関係ありません。月1回、週末の午後にカフェ・ラバンデリアに集まっています。ご関心のある方は、フェイスブックで「メキシコに平和を 刺繍サークル」で検索してみてください。

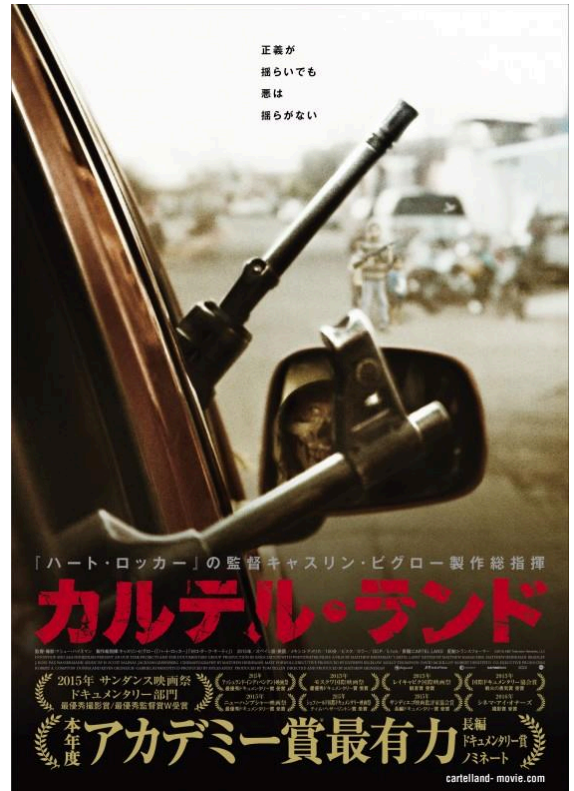
カフェ・ラバンデリア  
東京都新宿区新宿2-12-9 広洋舎ビル1F  
TEL 03-3341-4845

# 5月公開のドキュメンタリー映画『カルテル・ランド』

2013年1月、メキシコ中西部ミチョアカン州で「自警団」が蜂起した。当時、「テンプル騎士団」カルテルが州内の大部分を支配し、残虐の限りを尽くしていたが、州政府はカルテルと癒着し、警察も軍も役に立たない。そんな状況に業を煮やし、民間人が武器をとって立ち上がったというものだった。

自警団のスポークスマンで、カリスマ的リーダーのホセ・マヌエル・ミレス医師を中心に、ミチョアカン戦争とも呼ばれた激しい抗争のただ中にカメラを持ち込み、生々しい銃撃戦や拷問や裏切りもある汚い戦争の現状を捉えたドキュメンタリー。同時進行で、メキシコ・アメリカ国境地帯で、メキシコ人の不法移民を阻止しようと結成された「アリゾナ国境自警団」の活動も追っていく。

話の筋は、はっきりいってわかりにくい。メキシコの麻薬戦争と呼ばれる状況そのものが、正義も悪もない混沌としたものだけに、よほどミチョアカンの情勢に通じた人でもないかぎり、とくに後半になると、それぞれの場面がどういうことを表しているのか、読み解くことは難しいだろう。アカデミー賞受賞を逃したのも、そのわかりにくさが一因だったかもしれない。それでも、フィクションよりもずっとショッキングな場面の連続に、どうやって撮影が可能だったのかと驚かされることは確かだ。（山本昭代）



監督・製作・撮影・編集

マシュー・ハイネマン

製作総指揮 カスリン・ビグロウほか

2015年／メキシコ・アメリカ／100分

シアター・イメージフォーラムほかにて、5月より公開。

## 天野芳太郎の思い出

私がリマ市で天野芳太郎(1898～1982)に初めて会ったのは1972年11月のことだった。一時的ながら17年ぶりに祖国に帰ったファン・ドミンゴ・ペロン元亜国大統領をブエノスアイレスで取材した私はメキシコ市への帰途、ペルーに立ち寄ったのである。天野が私財を投じて収集したチャンカイ谷の出土品を見せてもらうためだったが、それ以上に私が期待していたのは、既にラ米の日本人移住社会で伝説の人となっていた天野に会うことだった。リマの瀟灑なミラフローレス地区にある天野博物館は予約制で、電話をかけたところ、幸運にも今なら時間があるからどうぞと言われたのだ。

天野は2階から階段の手すりを伝いながらゆっくりと下りてきて、「脳の病気が全快していないため、この通りです」と笑顔で私の前に立った。だが次の言葉は、もつれてはいたが、「私のことを記事にしたり写真を撮ったりするのでしたら、これ以上時間を共にすることはできません」という厳しいものだった。当時74歳の天野と私には45年の人生格差があった。

「いいえ、ペルー文明のお話をうかがいたいのです」と答えると、快く応じてくれた。笑顔は先刻から続いていたが、その目は決して笑っていなかった。眼力鋭く、私の心を射るようだった。只者ではない、と直感した。

秋田県に生まれ工業教育を受けた天野は、青年時代に実業家として頭角を現した。1928年ウルグアイのモンテビデオに行くが、家庭の不幸で帰国を余儀なくされるも同年再び出国し、パナマ市に赴く。第1次世界大戦が終わった年で、パナマ運河は開通してから14年しか経っていなかった。天野は、運河で太平洋と大西洋(カリブ海)が結ばれ、南北両米大陸が地峡で繋がる「世界の十字露」パナマを(雄飛の地)と定めたのだ。

「天野商会」を興した天野は成功、ラ米の数か所に商取引の網を拡げ、リマにも拠点を設けて蓄財した。1941年12月、日米開戦に至るや、天野は逮捕され資産を没収された上、米国内の収容所に送られた。だが翌年、日米捕虜交換協定で帰国する。その時の捕虜交換船はアフリカ南端周りで、同船者の中には、ハーヴァード大学留学を打ち切られながら卒業資格を辛くも得て帰国を余儀なくされた鶴見俊輔(1922～2015)がいた。私は1972～73年メキシコ市で客員教授を務めた鶴見から、船中での天野との出会いの逸話を聴いていた。「天野芳太郎は凄い人ですよ」と鶴見は言っていた。

天野は敗戦日本を1951年離れ、ペルーに渡る。パナマで逮捕される前に友人に託していた資産を元に漁業会社を興し成功、実業を拡げる。翌年、出土品の収集を始めた。初めは趣味だったが、リマ北方郊外のチャンカイ谷の遺跡や出土品の研究がほとんど着手されていなかったのを知った天野は自ら研究者になることを志し、発掘と収集に情熱を傾け、1964年、リマ市に天野博物館を開いた。

私は展示室と、そこに収まりきれない出土品が詰めこまれていた

倉庫を見せてもらった。他に訪問者はおらず、私は天野から案内され、一対一で説明を受けた。染織展示場の壁には古く大きな布が掛けられていた。人の手ばかりを並べた絵柄の布があった。中央に近い所に、一つだけ6本指の手が描かれていた。「ここには反差別の思想があります。神は人の世に使われた者に、選良だとわかるように指を一本多く与え、常人と区別したのです。昔の先住民族はどのように教えられていました。つまり(片輪)を差別せず、(神の使者)として敬意を払わせていました」。私はそのころ、カリブ海にあるパナマの群島に住むクナ民族の地を取材していたが、狭い島々での血族結婚が何世代にも亘って続いたことから、アルビーノ(白子)が多く生まれ、暮らしていた。クナ社会でも彼らは「神から使われた選良」と言い伝えられていた。先住民族の智慧は普遍性があった素晴らしい、と思ったものだ。

天野は、(インカ)と呼ばれる文明の発祥、ケチュア民族の生活と宗教、現代ペルーによる(インカ)に対する偽善、などを語った。「侵入者たちから不当に弾圧され搾取されてきた(インカ)を少しでも高め、光を当てたい」との思いで、出土品収集を初めてからちょうど20年、チャンカイ谷を柱に文型の研究を続けていた。「玉蜀黍の原産地はペルーかメキシコか」という研究もして、ペルー説を採っていた。自説を語る時、目は青年のように輝いていた。

一通り話が終わると天野は突然、「私は米一粒に文字を100も書けるんですよ」と言った。天野は、かつてパナマ運河を見渡せる沿線に邸宅を構えていた。米海軍艦船や貨物船、客船などの通航を眺め監視することができただろう。天野が日本軍に諜報で協力していた事実は、知る人ぞ知る。そのことを本人は、米粒の話で私に伝えてくれたのだ。米当局が天野を警戒し収容所に送ったのには、わけがあった。日米戦争は太平洋戦争であり、パナマ運河は米軍の勝利に欠かせない海軍の大動脈として機能した。

「あと10年の寿命が期待できますので、文明研究一本で進んで行く。他のことにかかずらう時間はもうありません。別れ際に天野はそう言った。翌年、私はまたリマで天野に会った。しかし天野は、まさに10年の余命を全うして82年に84歳で死んでいった。私がラ米で会った日本人移住社会の人々の中で最も印象深い何人かの一人である。

後日談がある。1974年のことだったか、京都在住の鶴見から、傷心の加藤登紀子(歌手)が行くから世話してやってほしいとの連絡があった。私は1週間メキシコ市一帯を案内、ペルー行きを勧め、天野を紹介した。後に加藤から、天野に会い心が解放された、という趣旨の絵葉書が届いた。

【お知らせ】伊高浩昭執筆記事:「コロンビア内戦ー和平協定3月調印へ」(岩波書店「世界」4月号=3月8日刊)。「亜国右旋回、マク/新自由主義政権が登場」(月刊LATINA1月号)、「ニコライ・レオノフ著『ラウール・カストロ 革命の中の人』を読む」(LATINA2月号)。



## アレキパ、山と海の交わるころ

ペルーの南部に位置する国内人口第二位の都市であり、独立心の強い県民性からたびたび反乱を起こしているアレキパを今回は取り上げたい。と、のっけからこう書くところちょっとイメージが悪いですが、非常に美しい町に風景、そして美味しい食べ物と牧歌的な気候と実にいいところである。

高度約2000メートルに位置する県都アレキパ市は、シウダー・ブランカ(白亜の町)と呼ばれる美しい町である。もっとも人口増加に伴い盆地の大きさを越えて広がる町の外縁部は、そのような歴史街区を持つ美しさとは無縁の住居が立ち並んでいる。それでも市の中心部の建築物の美しさはなかなかどうして素晴らしいものである。また、ペルー富士とも呼ばれるミスティ山が町を見下ろす風景は日本人にとっても親しみやすい町だ。

そんなアレキパ市は、首都リマに続きペルーで二番目に人口の多い都市であり、早くからクリオーヨたちによる文化が花開いた町でもあった。と同時に周辺のアンデス集落にはさまざまなアンデス文化も豊かに残っている。沿岸クリオーヨ文化とアンデス先住民文化のせめぎあいと融合がアレキパ地方の魅力である。

アレキパを代表する音楽をひとつ上げるとすれば、おそらく今では時代の波に押しやられようとしているヤラビーがあげられるのだろう。ペルーの独立戦争に身を投じて亡くなったアレキパの詩人メルガールも愛したギターと詩による歌曲がヤラビーだ(アレキパはパジャドールと呼ばれる即興詩を歌う吟遊詩人の伝統が色濃い地域の一つでもあった)。基本的に男性二人による二声で歌われることの多い音楽で、アレキパを中心に広くエクアドルからアルゼンチン、チリまで愛された音楽の一つ

だ。多くの名曲がこの町で生み出されたが、そのゆったりとしたリズムに乗せて歌われる曲調が、20世紀後半以降、次第に顧みられなくなっていった。アンデスの伝統をクリオーヨたちが時間を掛けて咀嚼した非常に洗練された哀歌となっている。都市部だけでなく周辺の村々でもミスティ(アンデス地域の町)に居住している旦那衆たちが数多くの作品を残している。ポルトガル兄弟やデルガード兄弟などが有名だ。

そしてクリオーヨたちの音楽といえば忘れてはならないのがバルスだ。アレキパは数多くのバルスの名曲が生まれた町としても有名だ。「シウダー・ブランカ」や「メルガール」などはその代表格である。演奏家としては、ずば抜けて有名なのが、その



美しいコーラスとギターで有名なデュオ・ダバロスだ。ダバロス兄弟の演奏するバルスやマリネラ、ワイノなどは、今でもアレキパを象徴する音楽として愛されている。なかでもマリネラ・アレキペーニャである「モンテネーロ・アレキペーニャ」はアレキパを代表するマリネラとなっている。

また、アレキパを代表する曲として有名なものにアレキパのカーニバル曲がある。カルナバル・デ・アレキパと題されるその曲は様々な演奏家が

カバーしているが、上述しているドウオ・ダバロスがトランペットなどと一緒に演奏しているものは特に刺激的で忘れがたいものになっている。その秘密は、何故か彼らの演奏のみにみられる特徴として、曲中のブレイクの部分で一拍分抜け落ちている部分が妙な高揚感をもたらしているからではないかと個人的には思っている。

アレキパ県のアンデス音楽は、ワイノ、そしてその亜種であるパンペーニャ、そしてヤラビーとマリネラがその中心である。パンペーニャは、かつて多くの移民が来たというプーノ県の影響の強いワイノの亜種で、アレキパでのみ使われている名称である。

また、他の南部地域同様チャランゴ音楽も見ることが出来る。チャランゴ・パンペーニャとも呼ばれるアレキパのチャランゴは、アヤクーチョやプーノ、クスコなどともまた異なるスタイルを持っている。伝統的に5コース15弦の鉄弦が好まれている。

アレキパでもっとも有名なワイノを上げるとするならば「マンボ・デ・マチャワイ」だろうか。リマから故郷のマチャワイに帰ってきた男が、最新の音楽マンボを踊ろうぜと女の子を誘う歌だが、曲はマンボではなくあくまでワイノだというのが愛らしい。北部の歌手アバント・モラレスの録音がもっとも有名だが、地元マチャワイの楽団も今なお歌い継いでいる名曲だ。

70年代の黄金時代を中心に活躍した楽団を上げるならば、ロス・エランテス、トリオ・ヤナワラ、ロス・ミスティアノスなどが有名だ。チュキバンバ出身のギタートリオのロス・エランテスは、ワイノの合間にたまに入る「ジャッ」という掛け声が微妙にはまるというどうでもよい個人的な好みがある渋いワイノ・トリオ。またヤナワラ出身の3人が集まって結成されたトリオ・ヤナワラはトロ・ムニョスのチャランゴにコーラス兼ギターの二人のバンドで、

ヤラビーからワイノ、マリネラまで広いレパートリーが素晴らしい。また同じヤナワラ出身のチャランゴ奏者オスワルド・リマ・マンリケを中心に結成されたロス・ミスティアノスもアレキパを代表する素晴らしい楽団だ。

こうした伝説的な楽団に対し、現役で油の乗っている歌手がエレナ・ロハス・ディアンデーラスだ。アレキパのコタワシ出身の彼女は、バイオリンやギターを中心とした勢いのあるハラナなワイノが得意で、コタワシ音楽だけでなく、ペルー各地のワイノ曲集なども出したりもしている。

また、アレキパ音楽関連の思い出で忘れられないものといえば、以前リマでアレキパの県人会コンサートにおじゃました時、偶然聴くことが出来たコタワシ出身の伝説的ギタリスト、フレディ・フローレスの演奏が神がかっていて本当に素晴らしかった。なかなか録音にも出会えないこうしたローカルな神様がまだまだ数多く眠っているのもペルー音楽の面白いところで、これだからペルー音楽ファンをやめられないのである。



# 日本ラテンアメリカ子どもと本の会の活動から 国境を目ざす子どもたちを描いた絵本

宇野和美

昨年2015年4月、世界の70カ国あまりが加盟する児童文学の国際ネットワークである国際児童図書評議会 (IBBY) の財団は、REFORMAに1万ドルを助成すると発表しました。REFORMAは、ラテンアメリカ系米国人のための図書館サービスに関わる活動を行っている米国図書館協会の一部門で、難民収容所、一時保護施設、グループホームにいる、米国南部の国境地帯で保護された子どもたちに、「本は友達。本は光、あなたの避難所」というメッセージを添えたスペイン語の児童書を手渡す活動をしています。

IBBYは、子どもだけでメキシコと米国の国境を越えようとして捕らえられた18歳以下の子どもの数は2013~2014年が5万6千人、2014~2015年が2万6千人という、米国会計検査院の統計を引用し、暴力から逃れるためにエルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス等からアメリカに向かう子どもたちに目を向けるよう呼びかけています。

日本では翻訳出版が難しそうな作品ですが、刊行と同時に出版社からREFORMAに寄贈された絵本があります=写真①。

カナダのグラウンドウッド社刊行のTwo White Rabbits (2ひきの白いウサギ) です。英語の本ですが、作者はコロンビアの作家ハイロ・ブイトラゴと画家ラファエル・ジョクテング。前にここで紹介したことのある『エロイーサと虫たち』(さ・え・ら書房) というコロンビアの国内避難民をテーマにした絵本のコンビです。米国国境をめざす父と娘の旅が描かれます。旅の目的地が国境の向こうだという



ことはテキストでは語られませんが、絵では、川をわたる人、列車の屋根にのぼる人などが描かれます。移民局の役人から逃げるシーンも出てきます。見返しに心配ひきうけ人形が描かれているのは、親子の国籍がグアテマラだということを示唆しているのでしょうか、国境を目ざす人たちが夜ぐっすり眠れることを願ってのことでしょうか。

このテーマにがっぷり取り組んだ少し変わった絵本もあります。Migrar (移住する) というタイトルの作品です。ホセ・マヌエル・マテオ文、ハビエル・マルティネス=ペドロ絵。2011年にメキシコのテコロテ社から刊行され、2012年にイタリアのボローニャ・ブックフェアのラガッツィ賞ニューホライズン部門で最優秀賞を受賞しました。メキシコの農村で平和に暮らしていたぼくが母親と兄弟とともに、先に村を出て米国にいる父親のもとへ向かうという話が、マヤの絵文書であるコデックスにまねた掛け軸のような画面に、時間の経過を追って上から下へ描かれています。列車の屋根にのぼる人、物陰に潜んでいる人、柵を超えている人などがこまごまと描きこまれた画面は、思わず見入らずにはいられません。「苦労をしながら国境を越える少年少女たちの存在を忘れないため、彼らの生きる権利を訴えるためにこの本をつくった」という作者の言葉が最後にあります。

どちらもやむにやまれぬ思いや、伝えたいという強い意志のこもった作品です。





## 魚のマリネ

### CEVICHE DE PESCADO

今回は、ユカタン半島ではだれでも食べる料理を紹介します。手早く調理できて、ふだんの食卓にも来客時にも、パーティーや集まりへの持ち寄り料理にも喜ばれます。材料は安価で、どこでも手に入ります。「魚のセビチェ（マリネ）」です。

子どものころ、私の家ではしょっちゅう食べていました。とくに、セmanaサンタ（聖週間=2016年は3月20日の日曜日から）の時期の食卓にのぼりました。メキシコ人はふだんは魚より肉を好みますが、この期間は肉を食べてはいけないとされているため、魚介類をたくさん食べるのです。

魚のセビチェは、おいしくて栄養もたっぷりです。内陸の人も食べますが、やはり海岸部のほうで慣れ親しまれ、マヤ民族の人たちもよく食べています。

メリダ市の、とくに海岸に別荘がある人は、週末ごとにビーチで海水浴を楽しみます。ユカタンはあたたかいので、ほぼ1年中泳ぐことができます。もっとも寒い1月と2月でも、ユカタン港に家がある人は海で遊び、魚のフライや魚介のタコス、そしてセビチェを楽しみます。

私も子どものころはおじの別荘で、夏休みは1カ月、聖週間には1週間すごしました。

兄弟や従兄弟たちと魚釣りをして、昼には、自分で釣った魚でセビチェをつくりました。よく使った



のはHuachinango（フエダイ科）という魚で、この名前は、ナウアトル語の“cuachinácatl”から由来しており、「赤い肉」を意味しています。

ユカタンではこの魚はRubiaと呼ばれますが、スペイン語ではBesugoです。Besugoには23属230種もあります。日本語では「タイ」ですね。

Pargo(マダイ)など、生で食べられる他の魚でもセビチェをつくりませんが、Huachinangoほどセビチェにしておいしい魚はありません。

#### ■材料 4人分

- ・中型のタイ（400~500グラム）
- ・レモン 2個
- ・コリアンダー 適量
- ・コショウ 適量
- ・塩 適量
- ・コーンチップス 適量
- ・白いタマネギ 1/2
- ・トマト大 2個

#### ■作り方

1. 魚を2センチ角に切る。
2. トマトを洗って、細かく刻む。
3. コリアンダーをみじん切りにする。
4. タマネギを細かく刻む。
5. レモンを洗って半分に切り、果汁を搾る（種は取り除く）
6. ボールなどの容器に上記の材料を入れて、よくまぜ、塩コショウを加えてさらによく混ぜる。
7. コーンチップスといっしょにどうぞ。

## ペルー リマのゴミ対策に黒コンドルが活躍

人口が900万人以上の首都リマでは、1日に7400トンものゴミが出る。しかも公共のゴミ捨て場が不足しているために、違法な場所にもゴミが捨てられており、汚染などの問題も起こっている。ゴミ処理は市の処理能力を超える大問題となっている。さらに今後20年でリマのゴミは倍増すると言われている。その問題を解決するために、屍肉や腐敗物を食べる黒コンドルが使われることとなった。環境省とサンカルロス大学が協力するプロジェクトで、鳥にカメラとGPSを装着して放す。黒コンドルは長時間飛ぶことができ、エサとなる動物の死骸や腐敗物を探す。大学は、鳥が送る映像をリアルタイムで受け取り、分析し、ゴミの環境汚染マップを作成する。鳥の生態を知ることでもできて一石二鳥だ。これらの鳥たちは特別な胃内フローラを備えて、強力な免疫システムを持ち、病気にかかることなく腐ったものを食べられる。いつもは嫌われている鳥が、ゴミ捨て場をきれいにしてくれるということで市民の評判はよい。(BBCMundo.com 21 diciembre 2015より)

## ペルー 石油の流出事故が15年で60回

1月25日にペルー北部アマソナス県バグアアで、ノルベルアーノ社石油パイプラインから石油が漏れる事件があった。続いて2月3日、ロレトイ県にある同じパイプラインからも流出事故があった。両方で3000バレル以上が漏れた。流出したペルー・アマゾン地域では川や畑を汚染し、動植物に被害を与えた。そのため地域の数十の共同体が飲み水も食べるものもない状態になった。病気も増え、1万人に及ぶ人たち（そのほとんどは先住民）が影響を受けた。1年近く前にも37万リットルの石油が漏れるという事故があった。事件が起こったパイプラインは、この5年間だけで20カ所が破損している。専門家はこのような事故は定期的に起こっており、汚染を除去するのは困難だという。ノルベルアーノ石油パイプラインはペルー国営ペトロペルーが運営しているが、パイプが老朽化しているにもかかわらず必要なメンテナンスが行われていないという。2000年10月にはプラスペトル社も5500バレルの流出事故を起こしたが、その時の汚染は20年以上続くだろうと言われた。それ以降現在にいたるまでニュースになっただけで60以上の事故が起こっている。事故は、パイプの破損だけでなく、タンクローリーの事故や、船からタンクローリーに移す時などにも起こっている。巨額の罰金が課されても、払われることがないままになっており、政府は事故を防ぐための有効な方策をとっていない。(America Latina en Movimiento online 2016/3/10より)

## メキシコの刑務所で49人が死亡

メキシコ北部ヌエボレオン州モンテレイ市のトポ・チコ刑務所で2月11日、受刑者同士の対立により49人が死亡した。ヌエボレオン州では他にも2012年にアポダカ刑務所で44人、カデレイタ刑務所では7人がいずれも麻薬カルテル同士の対立で死亡している。メキシコ国家人権委員会(CNDH)によると2014年には全国の刑務所で1737件の暴力事件があり、その82%は受刑者同士の対立によるものだった。

## ホンジュラス 環境活動家の暗殺相次ぐ

さる3月3日、先住民族リーダー・環境活動家のベルタ・カセレスが暗殺された。カセレスは「ホンジュラス民衆と先住民の全国協議会COPINH」の創立者で、先住民族コミュニティを破壊する採鉱やダム計画に反対し、2015年にその活動によりゴールドマン環境賞を受賞した。米州機構人権委員会は、その安全が懸念されているということでホンジュラス国家に対しカセレスの安全措置をとるように命じていた。その後COPINHメンバーであるネルソン・ガルシアも殺害された。カセレスと一緒にいた「地球の友FOEメキシコ」のコーディネーター、グスタボ・カストロは銃撃された後拉致されたが、国際社会の抗議があり、数日後に解放された。ホンジュラスでは2010年のクーデター以降、110人以上の環境活動家が殺害されている。

(Democracy Now! MARCH 08,2016より)

今回はこの「そんりさ」で、グアテマラでの戦時下性暴力の裁判についての報告をすることができました。判決は素晴らしい内容で、傍聴に行った私たちも感無量でした。紙面の関係で原告女性一人一人の声を紹介することができませんでしたが、機会があればそれも紹介したいと思います。今回の裁判は、メディアでも連日大きく扱われ、人々の関心がとても高く、原告の女性たちに対して共感と連帯が感じられたのが印象的でした。内戦が終わった20年前、都市部では農村部で何が起こったかを知っている人はとても少なかったことを考えると、大きな変化です。それは歴史を忘れないための努力を人権団体が地道に続けてきたということの成果でもあります。グアテマラだけでなくどこでも、過ちを繰り返さないために歴史を忘れないというのは重要ですね。(新川志保子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で7月 日(土)、  
 発送は関西で7月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)までアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- |                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| Vol.155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ | Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊 |
| Vol.154 グアテマラ揺るがす関税汚職 | Vol.150 メキシコのアフリカ系 |
| Vol.153 コロンビアを伝える旅    | Vol.149 コロンビア・アワ民族 |
| Vol.152 グアテマラ視察報告     | Vol.148 ナルコ・メヒコ    |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

### レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方  
 TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も  
 しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

67万2238円

<グアテマラ基金>

12万44418円

(2016年3月現在)